



地球研の構内に鹿が現れ、職員の運転する車にぶつかりそうになったのでご注意を、という連絡が管理部から流れました。実は私も同じ日の朝、玄関付近で草をはんでいた2頭の鹿が、私の乗ったタクシーにびっくりして、慌てて林に逃げこむのを目撃したばかりでした。このような事態は、この数年市内全体で増えているようです。地球研近くの田んぼも今は獣除けネットが張り巡らされています。市内の鴨川でも流れの中を悠々と遊ぶ小鹿の群れを私は見えています。こんなことは私が学生だった1960～70年代にはありませんでした。

近年の鹿の急激な増加、あるいは人里や市街地への出没の増加は、京都に限らず全国的な問題となっています。その原因がいろいろと議論されています。鹿の（狼や野犬などの）天敵の激減、鹿を捕獲する狩猟者の減少、「気候温暖化」に伴い、鹿の生息に好ましい山の環境に変化したこと等など。

ただ一方で、鹿の生息数は1960～70年代（まで）は非常に少なかったが、時代を今から数十～百数十年遡る明治時代初期などは、日本各地でかなり多かったという指摘も、北大の揚妻さんなどによりなされています（揚妻、2013）。揚妻さんによると、かつての人里近い山の森林は、人間の過度の利用にかなり荒れており、鹿のエサも枯渇して生息できず、鹿は人の手が及ばない奥山にこもっていたとのこと。確かに今は緑豊かな京都盆地周辺の山々も、江戸時代から昭和初期頃までは薪炭利用などによりはげ山に近かったことを多くの人々は忘れてしています。その後、燃料は石油石炭に移行し、植林も進んだ結果、山の森林は回復し、鹿も人里近くまで近づけるようになったとのこと。さらに1960年代以降の高度成長経済に伴う農山村から都会への人口の集中に伴い、過疎の山村や荒廃した里山が増え、狩猟者も減り、鹿の人への警戒心も弱まったことが、近年の「鹿の増加」へつながったというわけです。

この問題は、しかし、地球研 OB で「野生生物と社会」学会会長の湯本貴和さん（現・京大霊長類研究所長）に聞いたところ、まだまだ決着していないようです。地球研には、生態系と人間活動の関わりについて様々な角度から研究している方が多くいますので、さらに異論反論も聞きたいところです。鳴きはすれど、もの言わぬ鹿の言い分をこそ一番聞きたいところですが。

「奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」百人一首のこの歌にあるように、鹿は万葉・奈良の時代から日本の風土の一部となっていました。今は、鹿と人の新たな共存関係を模索すべき時期のようです。

（引用文献） 揚妻直樹、2013：シカの異常増加を考える。生物科学, 65(2): 108-116